## 博士論文要旨及び学位論文審査結果要旨

 

 保健医療学研究科保健医療学専攻 博士後期課程 作業療法学分野 学籍番号: 2186004 氏 名: 佐々木 千波
 学 位 授 与 年 月 日 令和 3 年 3 月 12 日 博士論文受理年月日 令和 2 年 12 月 9 日 論文審査終了年月日 令和 3 年 2 月 22 日

 博士論文名
 Visual illusions in Parkinson's disease: An interview survey of symptomatology

論

**Background:** Several types of visual illusions can occur in Parkinson's disease (PD). However, the specific illusion types experienced by patients with PD, as well as their frequencies, remain unclear.

**Objective:** This study aimed to investigate these illusion types.

**Methods:** We described 20 types of visual illusions in 40 patients with PD. For each illusion, the patients were asked whether they had experienced similar symptoms, and if so, to detail their experience(s).

**Results:** In total, 30 patients with PD experienced visual illusion(s) since disease onset; among them, 25 were still experiencing them. The most observed illusion types were dysmorphopsia, complex visual illusions, metachromatopsia, and selective diplopia. Other observed illusions included textural illusions, macropsia, micropsia, teleopsia, pelopsia, kinetopsia, akinetopsia, Zeitraffer/Zeitlupen phenomena, tilt illusion, upside-down illusion, and palinopsia. Additionally, aberrant perception of surface orientation (inclination) was reported, which is yet to be reported in association with any diseases. Visual illusions had detrimental effects on some of the patients' daily lives.

文

**Conclusion:** Systematic patient interviews regarding the incidence and details of visual illusions could offer important information for PD diagnosis and treatment.

要

旨

主查:作業療法学分野教授 佐竹真次

副查:作業療法学分野教授 佐藤寿晃、副查:看護学分野教授 安保寬明

新規性·有効性

パーキンソン病では各種の錯視が生じることは知られているが、どのような種類の錯視 位 がどのような頻度で体験されているのかは、まだ十分に明らかではなかった。

本研究では、パーキンソン病患者 40 名に多くの種類の錯視について伝え、そのような症 状を体験しているか否かを尋ね、さらにその体験の内容を詳細に聴取した。

その結果、パーキンソン病患者40名中30名が発症後から質問時までに錯視を体験して 論 おり、25人では質問時期にも錯視が継続していたという。報告された錯視は、変形視、複 雑錯視、変色視、選択性二重視が多く、その他、テクスチャーの錯視、大視、小視、遠隔 視、近接視、動視、失運動視、加速視、減速視、傾斜視、逆転視、反復視がみられたとい 文 う。従来まで、他の疾患でも報告のない、面の傾きの錯視と考えられる現象もみられたと いう。これらの錯視のいくつかは患者の日常生活に悪影響を与えている場合もあったとさ れる。

結論として、パーキンソン病患者の診療においては、錯視の有無、内容についての系統 的な聴取が重要であるとされた。

本研究の新規性は、比較的多くのパーキンソン病患者に系統的なインタビュー法を丹念 に用いて聴取したため、既報告の錯視だけでなく、他の疾患でしか報告のない種々の錯視 が確認できたことと、いかなる疾患でも報告のない、面の傾きの錯視を発見したことであ る。また、用いられた系統的インタビュー法は今後の臨床場面にも活用が期待され、有効 性も担保されていると考える。

## 信頼性

本研究の信頼性は、本研究がパーキンソン病患者 40 名の標本に基づく研究であり、再現 性を担保するためにも、一定の標本サイズを確保していると考えられ、また、研究方法も 明確であることである。

## 総評

以上のことから、本研究の論文は博士論文に値するものであると評価し、博士論文審査 に合格したと判断した。また、関連する口頭発表・試問を設け、明確な回答が得られた結 果、最終試験に合格したと判断した。

審

査

結

要

果

旨